白兎がエルフ殺しと呼ばれるのは間違っていない

みすてぃ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めて見た時のあの人はとても綺麗で、儚げて、触れば壊れてしまいそうで

出逢いはほとんど偶然で、あれから色んなことを教わって、色んな場面で助けて貰って、でも僕はあの人の心を助けられなくて――

ある夜、僕は決めた。

死に場所なんか与えてやらない。

死なせてなんかやらない。

ある時、僕は誓った。

大それた英雄になれなくても構わない。その代わり、彼女だけの英雄になりたい。そ

う、願った。
どこかの神様が言った。英雄に見つけてもらえるのは、ほんのひと握りだ、と。
それなら僕は、僕だけは、どんな時でもあの人を見つけ出してみせる。

目　次

もはや言い逃れできない ―――― 1

もはや言い逃れできない

ベル・クラネルについて評する人々は多い。
曰く、白髪頭の白兎
曰く、最短記録保持者（レコードホルダー）
曰く、ロキ・ファミリアの大型新人
曰く、エルフ殺しの白兎
曰く、白巫女（マイナデス）の愛玩動物（ペット）

さて、数ある異名のうち、どれが正しいのか。
正解――全部でした。
☆
18階層「迷宮の楽園」。
先日、遠征に帯同しなかった居残り冒険者達と一緒にダンジョンを探索していたところ、怪物進呈（バス・パレード）で殺されかけた挙句、転がり込むようにここまで辿り着いた僕。
自分のファミリア（ロキ・ファミリア）が遠征からの帰還中で、ここに滞在してくれていたのは僥倖だっ

た。そうでなければ、本当に行き倒れて死んでいたかもしれない。
アイズさんに拾ってもらって天幕まで移動――その後、何とか回復したのが翌朝のこと。
体調が戻ったのをいいことに、調子に乗ってダンジョンに戻ろうとした僕を見つけたレフィーヤさんが般若のように激怒したのがつい数時間前のこと。その後、寝付けなくて野営地の周りをウロウロしていた後、現在に至っている。
騒然とした闇に包まれる「夜」の時間帯。大森林の中に佇む湖。夜の光にその透き通るような肌を照らされ、しなやかで美しい身体の全体を水滴が流れる。率直に言って、神秘的――だと僕は思った。
それと同時に、美しい、とも。
（レフィーヤさんに会いに、わざわざ18階層ここまで訪ねて来てくれた……　んだよね。たしか）
夕食の際にレフィーヤがそのことを嬉しそうに話していたし、彼女の姿も目にしていた。というか、レフィーヤの仲立ちにより既に簡単な挨拶も済ませている。まぁ、あくまで簡単な、形式的なものではあったのだが。
なんでも、今日はこちらに宿泊して、明日僕らと一緒に最後尾で出発するとか。まぁ、護衛がいるとはいえ安全策を取るに越したことはない。その判断は納得だった。

第一印象は、大人の色気を漂わせながらも、それでいてとてもとても清楚な女性。言葉遣いはぶっきらぼうだが、レフィーヤに付き纏われて顔を赤くしている姿は正直可愛かった。白巫女、という二つ名も頷ける。どこかの国では巫女フェチなるものがあるそうだが、それも頷ける。

ベルの祖父が居ればきっとこう言っただろう。

ベル。巫女の裸体、それは男のロマンじゃ――と。

さて、問題なのは現状である。

先程目を奪われた女性が、清楚で綺麗で美しくて、どう表現したら良いか迷ってしまうような女性が

目の前で一寸纏わぬ姿を晒しているのだ。

ミノタウロスとの戦いの際、ベート・ローガは言った。あいつは雄だぞ、と。

そう、僕、ベル・クラネルとて、立派な雄なのである。いかに可愛いと言われる小さな身体にコンプレックスを感じていても、童顔にコンプレックスを感じていても。童貞で女の人をまともに触ったことがなくても。

チラリと目線を下に向ける。

うん。やっぱり僕の雄も間違いなく雄だった。などと訳の分からない思考に陥る。

要するに、パニック、混乱、自分でもわけのわからない状態に陥っていた。

妖精の守護者――という童話がある。透き通るような肌をした妖精。とある少年がその妖精の水浴びをうっかり覗いてしまい、あろうことかその美しさに一目惚れしてしまう。

挙句の果てには、真っ赤になって怒る妖精を前にして情熱的に求婚するという、本当にどうしようもない物語。

読んだ時はさすがにこれはないだろう。そう思った。そう思ったんだけど……

（ま、まずい……　早くここから離れないと。で、でも……）

何が、でも……　なのか全くもってわからない。わからないけど、覗き始めてから約五分が経過した今も、未だこの木陰から離れられない。あぁ、女性に魅了されるってこういうことかぁー。

なんて呑気なことを考えてしまっている

僕……　レフィーヤさんがまたしても僕に向けて般若のような表情を浮かべているのが見えたが、きっと幻想だろう。きっと。

ともあれ、あのどうしようもない童話も、あながち馬鹿に出来たものじゃなかった。

そんな下らないことが頭を過ぎったその時、僕はさらに食い入るように、湖の中の彼女に視線を向けた。

（泣い、てる……？）

何かを抱えるように、自らを護るように両手を前に回した後、彼女は天を見上げた。そして、その瞳から――透明なものが流れる。

顔に血が登っているのがわかる。きっと、今の僕の顔面は茹でダコのように真っ赤に染まっているのだろう。

ゴクリ、と唾を飲み込む。出来ることなら、いつまでもこの美しい人を見ていたい。そんな馬鹿なことを一瞬でも考えてしまったぼくだったけど、

肝心なことを忘れていた

彼女――フィルヴィスさんはレベル３の冒険者。死線を潜り抜けてきた場面は数知れないだろうということを。レフィーヤさん曰く、自分よりも凄い冒険者だと言っていたこと。当然、レベル２の僕が少しでも近づけば、余裕で気配を察知されるであろうことを。すっかり失念していた。

――かくして、その瞬間は訪れる。

「何者だ!?」

片手で胸を隠しながらの、咄嗟の投擲。飛んできたのは、護身用のナイフ。

見事に刺さった刃物。左足首の激痛。出血。思わず奇声を上げながらのたうち回った挙句、湖へ転落。

奇声は情けない声に変わり、顔面から落下した僕は、ぶくぶくと水面に空気を吹き込む。

そう。彼女が隠し持っていたナイフの投擲を避けきれないくらいには、僕は魅入ってしまっていた。

（ああ、妖精っているんだなぁ……）

白巫女（マイナデス）、フィルヴィス・シャリアと白兎（ホワイト・ラビット）、ベル・クラネルの運命が交わったその日。

美しき白巫女の心象は、まったくもって最悪だった。